

RIKKYO

More Valuable Education

M O V E

立教大学 大学教育開発・支援センター

Newsletter

Center for Development and Support of Higher Education

20

開催報告

春学期シンポジウム

「育てる」アクティブ・ラーニング—学生とつくる大規模授業—

[2017年7月5日]

大規模授業であってもアクティブ・ラーニング(AL)を自分の授業で試みたい、より深く理解できる授業に改善したいと考える教員がヒントを得ることを目的として、池袋キャンパスでシンポジウムを開催しました。基調講演でなぜALを行うのかについて確認したうえで、具体的な学習目標の実現に向けた手法を選択するという授業デザインの考え方を全体から学びました。学内外から43名が参加し、「自分で工夫できる可能性が広がった」など、自身の授業改善へつなげる感想が寄せられました。



左から船守美穂氏、孫斉庸氏、浜崎桂子氏、小澤康裕センター員(司会)

シンポジウムではまず、船守美穂氏(国立情報学研究所准教授)による基調講演が行われました。船守氏はALを含め協働学習が求められている背景や様々な手法を整理し、高校や大学での事例を具体的に紹介くださいました。ALをすることを目的化するのではなく、ALは目標に照らした授業方法の選択肢の一つであると、一貫して強調なさいました。

続いて、孫斉庸氏(法学部准教授)と浜崎桂子氏(異文化コミュニケーション学部教授)による事例報告が行われました。

孫氏には、履修者350名規模の「政治学入門」において、様々な手法を試しながら学生の様子を見て改善を重ねるプロセスをご報告いた

きました。前年度までの手応えと課題を紹介されたうえで、今年度にはBlackboardを活用しながら予習→プレテスト→講義→QUIZというサイクルの徹底を試みたこと、またその成果について話されました。

浜崎氏には、150名規模の「カルチュラル・スタディーズ特論」におけるグループワーク(GW)実施の経緯と意図、実際の取り組みをご報告いただきました。予想外の履修者数に苦肉の策として始めたGWであったこと、しかし、本来のねらいであった文化に対する各自の通念を疑うきっかけを得る機会として位置づき、次の学習へつなげる授業となっていることを話されました。

最後の質疑応答では、コミュニケーションを苦手とする学生の存在をどう捉えるかが話題となりました。船守氏は、何かをして学ぶ人、見て学ぶ人、聴いて学ぶ人など学生の学習スタイルは十人十色であり、様々な方法で授業をデザインしてみることの意義を指摘されました。授業の規模が大きくても、教員の熱意が何より学生に伝わるのだというメッセージに勇気をいただき、シンポジウムは盛会のうちに終了いたしました。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 山路 茜



近日刊行

大学教育開発研究シリーズNo.26

「育てる」アクティブ・ラーニング—学生とつくる大規模授業—

上で報告したシンポジウムの記録冊子を2017年10月に発刊する予定です。シンポジウムの詳細を資料とともに掲載いたします。全専任教員に配布するほか、HPにも掲載しますので、ぜひ一読ください。



Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みなどを紹介するコーナーです。第7回となる今号では、前号に引き続きルーブリックを用いた授業を紹介します。複数のルーブリックをねらいに即して授業の中でどのように活かしているかについて、阿部善彦准教授(文学部)にお話を伺いました。

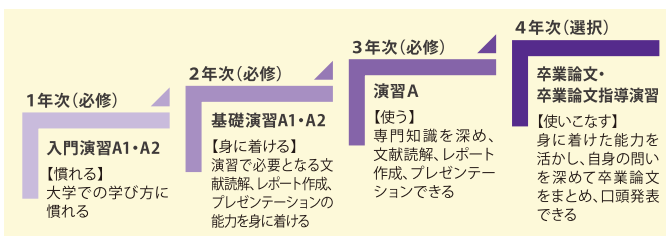
個別指導を充実させるルーブリックの活用

文学部准教授 阿部 善彦

「キリスト教学基礎演習A1」の位置づけ

Q: 「基礎演習A1」とはどのような科目ですか？

阿部: 基礎演習の目標は、3年次から始まる演習で必要となる、文献読解、レポート、プレゼンテーションに関する能力を身につけること、また、4年次の卒業論文で必要となる能力や問題関心を養うことです。1年次では、大学での学び方に慣れるということが中心ですが、2年次からは、より専門的な研究・調査に向けて、ステップアップすることが課題となります。「基礎演習A1」は、2年次生が春学期に受講します(1クラス20名程度)。



(図1)文学部キリスト教学科における4年間の演習の体系

Q: 先生は今年度「基礎演習A1」の目標をどのように定めましたか？

阿部: このクラスでは到達目標を3点定めました。「自分の研究したいこと」を、①研究テーマ、研究概要、研究目的、研究方法、資料・参考文献などの、一定の形式のもとで研究計画書としてまとめること、②それにかかわる主要文献のブックレビューを作成すること、③そして①②を自分以外の人に説明できるようにすることです。

学生に問題意識を明確化させるために

Q: ルーブリックを用いた目的を教えてください。

阿部: 演習や卒論指導を経験してみると、1、2年次の段階で自分の問題関心を深めておくことが大事だと感じます。そのため、2年次の基礎演習の段階で、学生自身の内にある問題関心を明確にさせる指導が必要であると考えています。

キリスト教学科の学生は、入学以前から、何らかの問題関心をもっていますが、2年次4月においては、まだ漠然としています。こうした問題関心は、演習、卒論のみならず、大学での学び全体や、人生における学び全体を支える土台となるので、大切にはぐくみたいと思います。

各人の問題関心を明確化するためには、互いに応答しながら理解を深めあう他者とのコミュニケーションの経験も重要です。そこには、言葉による実際の対話やテキストとの内的対話などの様々な対話が含まれますが、それらを通して内在する問いと答えが明確になり、探究はいつそう自覚的なものになります。そこで、このクラスの授業プランはブックレビューに関するグループでの相互発表を軸とし、ルーブリックを活用して運営することにしました。

グループ学習主体の授業

Q: 授業の進め方について教えてください。

阿部: この授業で用いたルーブリックは、3種類です。研究計画書の作成時は「論証型レポート・ルーブリック」と「プレゼンテーション・ルーブリック」、ブックレビューの作成時には「ブックレビュー・ルーブリック」を使用しました。いずれも大学教育開発・支援センターで提供しているものを科目に合わせて改変したものです。各ルーブリックは、課題について説明する段階で、学生に提示しました。

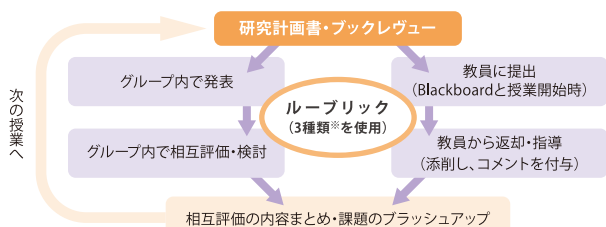
全体の流れとして、まず①Master of Writingを使ってテーマ設定の方法、参考文献の探し方について説明し、②学生は、研究計画書のうち、研究テーマ、キーワードを提出します。③学生はグループで相互に検討を行い、教員からの指導も受けます。次に、④学生は、キーワードから立教OPACやREADなどの検索ツールで文献を探し文献表を作成します。⑤2回目の教員からのフィードバックと学生間の検討を受け、テーマやキーワード自体も再考します。その後、⑥自分の研究に必要な文献を二つ選定し、内容説明と選定理由をレポートにまとめて提出し、⑦教員



からの指導と学生間の検討を受けます。ここまで来た段階で、学生は⑧一つ目のブックレビューを作成し始めます。ブックレビュー・ルーブリックのほかにワークシートも準備し、それに基づいて指導しました。⑨教員の指導と学生間の検討により⑧が十分なレベルに到達したら、二つ目のブックレビューを作成します。また、⑩並行して研究計画書も指導します。自分の研究を研究テーマ、キーワードのほかに研究概要、研究目的、研究方法、資料・参考文献のかたちで説明することを課題としました。⑪プレゼンテーション・ルーブリックを使って学生間での検討を行い、教員からの添削も受けて研究計画書を完成させます。

②-⑩の進行では、学生は授業時に必ず課題を印刷して提出し、教員はその時間内で毎回添削・指導して返却します（課題は各授業の前にBlackboardにも提出）。その間、学生はルーブリックを活用して学生間で評価・検討を行います。教員の指導と学生間の検討結果をふまえて改良し、次回には、学生間の検討内容とともに書面で教員に提出します。

教員は提出物を返却する際に、必要に応じて個別にコメント・指導を行います。授業回数を重ねると、授業の終了後にそのコメント・添削をきっかけとした質問を自発的にしに来る学生も増えました。



※論証型レポート/プレゼンテーション/ブックレビュー

(図2) 1回の授業の進め方

Q：指導のポイントを教えてください。

阿部：指導においては、まず、研究テーマの重要性に気づいてもらうことを重視しました。初心者にとって問題関心にふさわしいテーマをつけるのは難しいことですが、変更した論証型レポート・ルーブリック

ック(図3)を使って、研究テーマについて繰り返し指導しました。

研究概要、研究目的、研究方法については、最初は、動機やきっかけの説明に終始しているものが多かったのですが、変更したプレゼンテーション・ルーブリックを使って、考えるべき点を示しました。研究概要は、「この研究は何についてのどのような研究か」に対する説明になること、研究目的は「この研究は何のためか」に対する説明になること、研究方法は「この研究をどのような手順で行い、最終的結論の解明まで導くのか」に対する説明になること、として指導しました。ルーブリックはいずれもその点について例示する変更を行っています。

ルーブリックを活用した指導の効果

Q：先生や学生にとって、具体的にどのような効果がありましたか？

阿部：20数名の学生を一对一で授業時間内に指導するのは非常に難しいことです。しかし、当日提出された「研究計画書」と「ブックレビュー」を授業時間内に添削して返却することで、非常に個別な指導が有効に行えるようになりました。学生も教員のコメントを手元にもって質問できるので、質問が増え、指導のコミュニケーションもスムーズになったように感じます。繰り返し指導が必要になる基本的項目を、ルーブリックを用いることで個々の学生に短時間で示すことができ、添削時間もかなり節約できます。グループ内での発表も、プレゼンテーション・ルーブリックを導入することで、相互の評価・検討の実施が容易になりました。

また、授業回数が進むと、課題の進展に学生間で差が出てくるので、グループを達成度別に分けて、研究テーマがまだ定まらない学生グループを集中的に指導できています。ルーブリックを活用することで、教員は、学生一人一人が自分自身の問題関心を探求・発見するように促すやりとりに、多くの時間を使うことができている。

	観点 ()はMaster of Writingの 対応ページ	レベル1 「入門」	レベル2 「発展途上」	レベル3 「目標到達」	レベル4 「卓越」
テーマを設定する	観点1 研究・調査の対象・領域を選 定し、絞り込んで、適切な テーマを設定する(pp.3-5)	何を研究・調査の対象・領域としてい るのかわからない。まったく絞り込みがな されていないので何を論じたいのかイ メージができない。 (例：アメリカについて×)	研究・調査の対象・領域が広すぎて、漠 然・曖昧である。絞り込みがなされてい ないので何を論じたいのか具体的にイ メージができない。 (例：アメリカのキリスト教について×)	研究・調査の対象・領域が適切に選定さ れ、絞り込まれており、何を論じたいの か、具体的にイメージができる。 (例：アメリカのドイツ系プロテスタント 教会の形成について：最初期の移民を 中心に)	研究・調査の対象・領域が適切に選定され、 絞り込まれており、問題、問いとして何を明 らかにするのかがはっきり示している。 (例：ペンシルヴァニアになぜドイツ系プロ テスタントが集中したのか：ウィリアム・ベン による信仰の自由の保障を中心に)

(図3) 論証型レポート・ルーブリックからの変更例(一部を抜粋)

学生の声

この授業を通じて、研究テーマを発展させた学生の一人にルーブリックを通した学びの経験をうかがいました。

ブックレビュー・ルーブリックに沿った文献調査、話し合いは、通常の話合いよりも、グループ内で互いに良い点、改善点を明快かつ活発に伝え合うことができ、次回の文献調査に反映させることができました。また、ルーブリックに沿った文献調査を進めるうちに、初めは曖昧だった研究テーマが、焦点の絞られた内容の濃いものになったと感じます。

私の夢は将来中南米でボランティアや仕事をするのですが、最初のテーマは「中南米でボランティア活動をするためには」という曖昧なものでした。そこで国際NGOの中南米各国での活動を文献で調査し、ホンジュラスを研究対象としました。ルーブリックに沿って研究テーマを深める中で、ホンジュラスに対する日本の教育面での援助、主にJICAが行った「算数指導力向上プロジェクト」の有効性に興味を持つようになったからです。そこから最終的に「JICAが行ってきた「算数指導力向上プロジェクト」によるホンジュラスの貧困問題解決(社会発展)をさらに発展させるためには」というテーマにたどり着き、教育面だけでなく、インフラ面からも社会発展について考えることができました。今回の研究は、私の将来に役立つものになったと感じています。



文学部キリスト教学科2年 渡邊 史香

ルーブリックの活用をおすすめします

学生のレポートやプレゼンテーションを指導する際に、評価のポイントが学生にうまく伝わらないと感じることはありませんか?このように、学生のパフォーマンスの質を教員・学生相互によりわかりやすくスムーズに評価して伝えるものがルーブリックです。ルーブリックは、評価する観点(基準)とそのレベル(基準)をマトリクスで示すもので、そこには教員の指導の道筋が可視化されているといえます。ルーブリックを学生に提示することにより、学生には進むべき先が見えるとともに、レポートや発表の相互評価を行うなど、授業方法の幅も広がるのが期待されます。

当センターでは、主に初年次指導向けとして「論証型レポート・ルーブリック」と「プレゼンテーション・ルーブリック」を2015年度に開発しました。ルーブリックの内容は、Master of WritingとMaster of Presentationに対応しており、冊子とあわせて授業で利用できるようになっています。専任教職員・兼任講師の皆様が本学の授業において使用される場合に提供しています。これらをひな形として、使用する年次や分野の特性にあわせて改変し、ぜひご活用ください。

▶ 論証型レポート・ルーブリック

観点	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
論旨の明確さ	論旨が不明確である。	論旨が不明確であるが、一部明確である。	論旨が明確である。	論旨が明確である。論旨の展開が論理的である。
論拠の豊富さ	論拠が乏しい。	論拠が乏しいが、一部豊富である。	論拠が豊富である。	論拠が豊富である。論拠の展開が論理的である。
論理の展開	論理の展開が不明確である。	論理の展開が不明確であるが、一部明確である。	論理の展開が明確である。	論理の展開が明確である。論理の展開が論理的である。
表現の適切さ	表現が不適切である。	表現が不適切であるが、一部適切である。	表現が適切である。	表現が適切である。表現の展開が論理的である。

▶ プレゼンテーション・ルーブリック

観点	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
内容の明確さ	内容が不明確である。	内容が不明確であるが、一部明確である。	内容が明確である。	内容が明確である。内容の展開が論理的である。
論拠の豊富さ	論拠が乏しい。	論拠が乏しいが、一部豊富である。	論拠が豊富である。	論拠が豊富である。論拠の展開が論理的である。
論理の展開	論理の展開が不明確である。	論理の展開が不明確であるが、一部明確である。	論理の展開が明確である。	論理の展開が明確である。論理の展開が論理的である。
表現の適切さ	表現が不適切である。	表現が不適切であるが、一部適切である。	表現が適切である。	表現が適切である。表現の展開が論理的である。

申込先(大学教育開発・支援センター)

cdshe@rikkyo.ac.jp

メールの本文に以下の4点を記載してください。

- 1) 使用されるルーブリックの種類(「論証型レポート」または「プレゼンテーション」、
- 2) 使用する本学の授業科目名、3) 履修者(学部・年次)、4) 提供する形態(出力紙または電子ファイル)

新・副センター長あいさつ

当センターでは今年度4月より、副センター長(部会長)が交代しました。以下に、TL(Teaching and Learning)部会および教学IR(Institutional Research)部会の両部会長からのメッセージをお届けします。

副センター長・TL部会長 **阿部 善彦**
(文学部准教授)

2015年4月からTL部会センター員となり今年度はTL部会長を務めております。前任の小澤康裕先生をはじめ部会の先生方、助教、事務局の皆様をサポートいただいています。現在、TL部会ではMasterシリーズやルーブリックの改良と活用に向けた広報活動、FDに関するシンポジウムなどの企画・運営を担っていますが、その目指すところは、専任・兼任、教員・職員を問わず、本学の教育を支える皆様が自由に交流し、かづけられるような場所や機会をひらくことだと考えております。ぜひ、ご意見・ご要望をお寄せください。



副センター長・IR部会長 **一ノ瀬 大輔**
(経済学部准教授)

2017年4月から大学教育開発・支援センターのIR部会長を務めております経済学部の一ノ瀬です。本部会では、学生生活や学習環境の質の向上を目的として、学修状況の調査や卒業時アンケートの実施、英語プレメントテスト結果の検討など、教学に関わる各種データの収集、ならびに分析を行っています。部会長に就任してから日が浅く、試行錯誤の日々ですが、教学情報の整備と充実、その活用という側面からより良い大学づくりを支援できるよう努めて参りますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

「MOVE 第20号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2017年9月26日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

編
集
後
記



今年4月より助教を務めております山路茜と申します。教育方法への質的心理学によるアプローチを専門とし、他者に助けを求める行為に着目して協働学習のプロセスを研究しています。本学の授業改善・学びの質向上に貢献できるよ

う、教員・職員の皆様のあらゆる取り組みや学生の姿から真摯に学び、情報を発信してまいります。